



アムネスティ・インターナショナル

リビア調査報告 2011年3月29日

AI index: MDE 19/011/2011

## リビア: 拘束され、行方不明になっている人びと

### 抄 訳

2011年2月中旬に騒乱が始まって以来、ムアンマル・アル＝カダフィ大佐派の軍によって多くの人びとが強制失踪の状態となっている。その中には、リビア東部で逮捕・拘禁され、カダフィ大佐派が支配するトリポリに移送されたと考えられる人びとも大勢いる。拘禁されたり、強制失踪の状態にある人びとは、拷問やその他の深刻な人権侵害を受ける危機にさらされている。

リビア政府は拘束した人びとの情報を公開しておらず、また、リビア国内における独立した調査を実施することができないため、その実際の数を計ることは不可能である。実際、多くのリビア人や海外のジャーナリストが、リビア政権側の軍が市民を逮捕・攻撃したりした現場から報道しようとしたために、逮捕され暴行を受けている。そのうちの何人かの所在はいまだに不明のままである。

2011年2月26日以来、アムネスティ・インターナショナルの事実調査団はリビア東部に滞在し、複数の都市を訪れて強制失踪させられた人びとの親族や友人から聞き取りを行った。多くは2月上旬頃から強制失踪の状態にあるが、1月上旬から行方不明のままとなっている者も何人かいた。

アムネスティが記録した行方不明の人びとは、以下の3つに分類される。

- **2011年2月17日にリビア各地で行われた平和的なデモの直前に拘束された、政府批判者、民主活動家、作家など**：長期にわたる抑圧的な政権を退陣させたチュニジアやエジプトの抗議行動の後、同様の抗議行動の芽を摘むために先手を打って逮捕されたと思われる。アムネスティは、トリポリ、ベンガジ、アル＝バイダ、ミスラタンにおいて逮捕されたケースを記録している。拘束された人びとの所在は不明のままである。中には、逮捕された当初は家族や弁護士との面会が許されていたが、抗議行動が始まると連絡を遮断されたケースもある。
- **ベンガジにおいてカダフィ大佐派の特別部隊が反政府デモ隊と衝突し、軍施設から撤退を余儀なくされた2月20日の夜に、行方不明になった反政府デモの参加者と若者**：アムネスティは、9人の男性と少年が、特別部隊カテバ・アル＝ファディール軍施設に行った後で行方不明になったことを確認している。カテバの部隊または別の部隊によって拘束されたか誘拐されたと考えられている。
- **カダフィ大佐派と反政府勢力の間で断続的な戦闘があったベン＝ジャワドの街の近くで拘束されたと報告されている人びと**：ベンガジ西部のアデビアとベン＝ジャワドの間で大勢が行方不明になっている。そのうちの何人かは戦闘員だが、その他は、負傷者を救助するために現地に向かった一般の市民だった。現在、多くの行方がわからないままとなっており、身の安全が非常に心配されている。



カダフィ大佐の支配下にある、あるいはその勢力の攻撃を受けているトリポリやその他の地域からの報告によると、強制失踪の状態にある人びとの数は、アムネスティが把握しているよりもずっと多いと考えられる。それらの地域にアムネスティは入ることができず、また、情報の統制が依然として厳しい。

リビア中で、強制失踪となった被害者の家族は報復を恐れて暮らしており、公に名前を公表することをためらっている。

カダフィ大佐の部隊によって強制失踪させられた人びとは、拷問や虐待、場合によっては超法規的処刑の危険がある。拘束され、国際的な仲裁によってその後釈放された外国人ジャーナリストは、殴られ、暴行を受け、処刑すると脅されたと報告している。模擬処刑を受けたジャーナリストも何人かいた。彼らは、拘禁中に虐待を受けていたリビア人を心配していた。

何人かの被拘禁者は、彼らの親戚や友人が反カダフィ勢力に加わることを阻止する目的で圧力をかけたり、交渉材料として囚われた恐れもある。また、東部において反政府勢力が捕らえたカダフィ大佐派の兵士と交換するために拘束された可能性もある。単に反政府抗議行動がさらに実施されることを防ぐために拘束されたのかもしれない。

2011年2月26日、国連安全保障理事会は、リビアの事態を国際刑事裁判所（ICC）の検察官に付託する全会一致の決議を採択し、検察官は、2月15日以降に起きた人道に対する罪の容疑でカダフィ大佐とその家族、協力者を調査すると公表した。こうした流れの中、アムネスティは、カダフィ大佐と上級司令官などに以下を呼びかけている。

- ・ 被拘禁者の家族や弁護士に拘禁場所と逮捕容疑をすぐに伝え、彼らの安全と健康を保証するために第三者が拘禁場所を訪問することを認めること。
- ・ 抗議デモを支持する意見や平和的な活動を行ったことだけで囚われているすべての人びとを即時かつ無条件に釈放すること。
- ・ 捕虜となった兵士、あるいは兵士と考えられている人びとを国際法に基づいて人道的に取り扱い、家族にその状況を伝えるために赤十字国際委員会との面会を認めること。
- ・ 国際人道および人権団体が、政府によって支配されている地域に入ることを認め、制限や妨害を受けずに活動できるようにすること。とくに、捕虜の拘禁場所を含め、リビアのすべての拘禁施設を赤十字国際委員会が訪問することを認めること。

### **作家、ブロガー、民主活動家、平和的なデモ参加者**

2011年1月上旬から、複数の作家、民主活動家などが、カダフィ大佐派の治安部隊に逮捕された後、強制失踪の状態になっている。何人かは後に釈放されたが、そのまま行方がわからない者もいる。

彼らは、でたらめに逮捕されたわけではなく、明らかに当局の標的となっていた。政治改革を達成するために大衆運動を呼びかけたり支持したりする意見や文章を書いたことが理由である。



一連のデモが始まる直前やその最中に逮捕された人びともいる。彼らは、2月17日に呼びかけられたデモを組織した重要な人物だとリビア当局が考えたため逮捕されたと思われる。

リビア軍の大佐であり7人の子どもの父親であるアデル・アブドゥラ・エル＝ジェハニ (Adel Abdullah El-Gehani) は、2月14日、ベンガジにおいて軍事諜報局員によって逮捕された。カダフィ政権下の人権侵害を批判し、政治改革のためのデモを呼びかけた文章をブログに投稿したためと思われる。逮捕されて以来、家族は何の情報も得ていない。

アリ・アブデロウニス・アル＝マンソウリ (Ali Abdelounis al-Mansouri) は2011年2月2日、トブルクにおいて、おそらくは国内治安局 (ISA) によって逮捕され、トリポリの拘禁施設に移送されたと考えられている。逮捕前、より一層の自由を支持する平和的なデモをインターネットで呼びかけていた。

石油会社の技術者である41歳のサファイ・エッディネ・アル＝シャリフ (Afai Eddine Hilal al-Sharif) は、2月24日に逮捕された。以来、家族はその消息について何の情報も得られていない。家族はアムネスティに次のように話してくれた。

2月24日の午後8時ごろ、ISAと思われる私服の男たち6人が、外にいた子どもたちに、父親が在宅かどうかをたずねて呼び出すように言いました。サファイ・エッディネが外に出ると、男たちはパジャマを着ていた彼をそのまま連れ出しました。30分後、男たちはサファイ・エッディネを連れて戻ってきて、家の中を探索しました。何を探しているのかと聞くと、「お前が持っているもの全てを探索するように言われたんだ」と答え、誰の命令かと聞くと、「それは言えない」と言い、コンピューター2台、カメラ、ビデオ、携帯電話を押収しました。男たちはサファイ・エッディネを着替えさせ、そのまま連行して行きました。午後9時半でした。以来、私たちは彼について何の情報も得ていません。ISAに知り合いがいる知人は、サファイ・エッディネはトリポリに移送されたと言っていますが、彼がどこに囚われているのか、健康でいるのか、ISAがサファイ・エッディネから何を得たいのか、まったくわかりません。どうして彼は連行されたのでしょうか？ 彼は、家族と仕事の間を往復する日々を過ごしていた、ごく普通の人間です。政治には関わっていません。インターネットとフェイスブックをブラウズするのが好きでしたが、それ以上のことはありません。彼がどこにいるのか、なぜ連れて行かれたのか、ただそれが知りたいのです。

当局による逮捕はその後も続いた。作家であり民主活動家のモハンマド・モスバ・ソヘイム (Mohammad Mosbah Soheim) は2月16日に私服のISAによって逮捕され、その際に身分証明書、パスポート、ラップトップ・コンピューターや書籍を押収された。それ以来、モハンマド・モスバ・ソヘイムの行方は不明で、逮捕理由もわかっていない。モハンマド・モスバ・ソヘイムは、有名な新聞『Cerene』で記事を書いており、ウェブサイトやフェイスブックで改革を訴えており、逮捕直前にはチュニジアを訪れ、自由の状況を調査していた。

モハンマド・モスバ・ソヘイムの親族の一人は、次のようにアムネスティに話してくれた。

・・・2月16日の午前11時15分頃、私はベンガジのISA事務所に行き、モハンマドについてたずねました。門の前にいた軍服を着た男は何も教えてくれず、もっと上の人間に聞くよう言いました。私服で白髪の、多分50代くらいの男性がやってきて、最初はモハンマドの逮捕について何も知らないと言いましたが、私



が強く訴えると、実は彼は拘禁されており、無事で、危機が終わったら釈放されるだろうと答えました。しかしその後、私たちはほとんど何の情報も得ることはできませんでした。非公式のルートで得たわずかな情報によると、モハンマドと、ベンガジで同じときに逮捕されたもう一人の作家ドゥリス・メスマリ (Driss Mesmari) がトリポリの秘密の拘禁施設にいるということでした。

2月9日に逮捕され、2月20日にISA職員が事務所から逃げ出した後で逃亡したジャラル・クワフィは、モハンマド・モスバ・ソヘムとドゥリス・メスマリを見たときアムネスティに証言した。

最初に拘束された最初の日、私はひどく殴られました。連中は、デモを呼びかける「文書」について繰り返し尋問し、フェイスブックの私のメッセージやウェブ上でのチャットをプリントアウトした紙が入った分厚いファイルを私に見せました。そして、私をトリポリに移送する予定だ、と言いました。

逮捕から数日が経ち（完全に隔離拘禁されていたので、その日が何日だったかはっきりと思い出せないのですが）、聞いたことのない声を聞き、新たに逮捕された人たちが連れてこられたのだと思いました。私は部屋のドアを叩き、トイレに行きたいと言いました。部屋の外に連れ出されたとき、モハンマド・モスバ・ソヘムとドゥリス・メスマリをちらっと見ました。彼らはわずかな時間しかそこにおらず、数分後に連れ出されました。2月20日、ISA職員が建物から逃げた混乱の最中、私はようやく抜け出すことができました。

ベンガジから約200キロ離れたアル＝バイダでも複数の逮捕があった。イマーン（説教者）のサラ・サレム・カマシュ (Salah Salem Kamash) は2月16日の午前4時に、自宅において、妻や子どもたちの目の前で逮捕された。サラ・サレム・カマシュはISA事務所に連行され、貧困や汚職、抑圧について話をして問題を引き起こしたと責められた。逮捕直後、サラ・サレム・カマシュはトリポリに移送されると告げられたが、幸いにもその日の夜に釈放された。

アムネスティは、リビア西部においても強制失踪の事件を何件か確認している。

例えば、平和的な抗議行動を呼びかけた、元良心の囚人のジャマル・アル＝ハジ (Jamal al-Hajji) だ。ジャマル・アル＝ハジは2月1日、トリポリの駐車場で、約10人の私服の治安部隊の隊員によって再逮捕された。治安部隊は、ジャマル・アル＝ハジの車にぶつけられたという苦情を誰かから受けたと告げたが、彼自身は否定している。隊員らは彼を覆面パトカーに押し込み、連れ去った。彼はいまだに拘禁されたままであり、反政府抗議行動が2月中旬に始まって以来、連絡が途絶えたままである。リビア政府は、ジャマル・アル＝ハジの拘禁場所や逮捕理由などを明かしていない。

また、カダフィ大佐派の部隊によってミスラタの自宅で2月16日に拘束された兄弟もいる。彼らは、ソーシャル・ネットワークのサイト上で抗議行動の計画についての情報を回していたと考えられている。家族は、拘束されてからこの6週間、2人に関する情報を何も得られていない。また、当局からの報復を恐れ、2人の名前を出さないようアムネスティに頼んだ。

ジュネーブに事務所を置くNGOであるリビア人権連帯は、カダフィ大佐派の官憲によって拘束された後に行方がわからなくなっている、その他の多くの人びとの情報を確認している。



モスクの礼拝者ですら、平和的な抗議行動を計画したという理由で逮捕されている。3月4日、何とか逃げる事ができた目撃者がアムネスティに語ったところによると、私服の治安警官がトリボリのミズラン通りのモスクにおいて、約150人を逮捕した。金曜礼拝の後に抗議行動を行うことを阻止するためである。何人がいまだに拘禁されているのかは不明である。

### 撤退する軍によって拘束され、行方不明になっているベンガジの住民

2月20日以来、少なくとも9人の男性と少年が行方不明となっている。彼らはベンガジ東部のカテバ・アル＝ファディールの軍施設が反政府勢力の手に落ちた日に、同施設を訪れた。

同軍施設にいた兵士たちが避難したというニュースが拡がったとき、市民は大騒ぎとなり、カダフィ大佐の軍の一部がまだ施設内に残っていたことに気づけなかった。行方不明者9人（そのうちの4人は18歳未満）の家族は、残っていたカテバ軍が施設を離れる際に彼らを連れ去ったと考えている。9人に加え、同日中に行方不明になった人びとがいるかはわかっていない。

14歳のモハメド・アリ・アル＝アキーリィ (Mohamed Ali al-Aqeely) は20日の夜に行方不明となった。カダフィ大佐派の部隊によって連れ去られた恐れがある。モハメド・アリ・アル＝アキーリィの友人は次のようにアムネスティに証言した。

近所でモハメドと会い、他の友だちと一緒にしばらくいました。そのとき、一人がモハメドに、カテバの軍施設がみんなに解放されたかどうか、確認しに行こうと誘いました。夜、カテバの横門に着きました。一緒にいた友だちが帰り、僕は中に入るのが怖くて門の側にいました。でも、たくさんの人が中に入っていました。モハメドも、みんなと一緒に中に入りました。ずっとモハメドを見ていましたが、彼は右側の最初の建物に入っていました。しばらくして、モハメドが出てきて、また中に入りました。たくさんの人が、あたりを行き来していました。ただ見ているだけの人、テレビのセットを持ってきている人、カテバの建物の中に火をつける人、色々な人がいました。しばらく待っていましたが、僕は家に帰りました。次の日、モハメドが帰ってきていないと知りました。

### 戦闘地域で拘束された人びと

ベンガジ西部のベン・ジャワドから避難してきた人びとによると、彼らはカダフィ大佐派の軍が「反逆者」と見なした捕虜を拷問にかけているのを目撃している。捕虜の中には戦闘員もいたが、多くは紛争下で捕まった一般人だった。

ある家族は、3月8日にカダフィ大佐派の兵士がいかにして彼らの家に押し込み、「反逆者」を探していたかを話してくれた。6～8人の兵士が居間の天井を銃床でドンドンと叩き、父親は家の中に残り、妻と6人の子どもは外に出るように言われた。家の柵の向こう側で、若者たちの集団が床に倒れており、7～8人は生きてはいるものの負傷しており、少なくとも3人は死んでいた。彼らは、カダフィ大佐の反対勢力であることを示す記章をつけていたが、捕まったときに武装していたのか、「反乱」軍に医療や後方の支援をしていたのかは定かではない。目撃した妻は次のように証言した。



負傷した人が倒れていましたが、何の助けもありませんでした。服に血がついているのが見えました。何人かは痛みで叫び声をあげており、何人かは水がほしいと住民に頼んでいました。私や近所の人たちがこっそりと水をあげようとする、兵士がそれを見て、助けるなど命令しました。私たちは怖くて、兵士の言うとおりにしました。

兵士らは捕らえられた人びとを軍用車両に乗せ、こう言っていた。「この犬め、懲らしめてやる・・・お前たちがやったことで苦しむんだな」。

戦闘地域で行方不明になっている人びとには、17歳のイブラヒム・ファティ・バエユウ (Ibrahim Fathi Ba' eyou) や18歳のハッサン・アル＝アンマリ (Hassan Sa' id Al-Ammari) も含まれている。2人は医学生で、3月5日にベンガジを離れ、同日の夜に連絡が途絶えたとき、ベンガジから約200キロ離れたアル＝ブレイカとベン・ジャワドの間にいた。2人は、戦闘による死傷者の情報に心配し、支援することを望んでいた。

ベン・ジャワドで3月6日に拘束された8人の家族によると、彼らを拘束したと思われる者 (カダフィ大佐を支持する勢力と考えられる) から親族に脅迫電話があった。家族は、彼らの生存について心配していた。家族によると、8人は3月5日に、戦闘に参加するか、あるいはカダフィ政権と戦っている勢力を助ける衛生兵として活動するために、ベンガジからベン・ジャワドに向かった。翌朝、2人は家族に電話し、他の大勢とともに拘束されたと伝えてきた。彼らはタジューラに移送されると言われたが、アムネスティが得た情報では、実際にはベンガジから560キロ離れたシルテに移送され、少なくとも最初の24～36時間はそこで拘禁されていたと考えられる。

また、3月5日、数十人が拘束された。拘束時、彼らはまだ武器を持っていなかったという。

3月10日、リビアのアル＝ナデール・テレビは、アルカイダのメンバーであると説明されたボランティアの医療関係者を含む21人の映像を紹介した。彼らはみな、私服を着ていた。そのうちの5人は顔を地面に伏せ、手を後ろに縛られた状態で、8人はうずくまっていたが目隠しをしていなかった。残りの8人は、目隠しをされ、手を後ろで縛られ、ひざまずいていた。映像は携帯電話で撮られたものだが、若い医療関係者の母親が息子を確認するには十分だった。その医療関係者は、目隠しをされていたが、5日前に家を出るときに着ていた服装のままだった。

その他の拘束された人びとも、アルカイダのために活動していると「告白」する姿を映されていた。しかし家族は、それを強く否定している。家族は、彼らが拷問を受けたか、アルカイダとの関係を自白するよう強制されたと不安に思っている。

何とか家族に連絡を取ったある捕虜は、ひどく殴られ、目にハサミを突き刺されて重傷を負った他の捕虜を見たときアムネスティに語っている。

その他にも、3月6日の早朝にベン・ジャワドでカダフィ大佐派の部隊によって拘束された男性の親族が、アムネスティに証言してくれた。男性は、他の数十人とともに、寝ているときに逮捕された。そのとき、彼らは武装していなかった。彼は電話をかけることができ、二度目の電話で、彼らがシルテの軍事施設で拘禁



されていると伝えた。その後、カダフィ大佐の部隊の兵士から、その男性の携帯電話を使って男性の兄弟に電話があり、「お前と母親、兄弟姉妹を焼いてやる」と脅迫された。

他の被拘束者の2家族も、「墓を掘れ、奴は死んだと思え」といった脅迫電話を受けている。

32歳のソフィアン・サレム・セノウシ・ボウジェナ (Sofian Salem Senoussi Boujena) は3月6日、ベンガジから西に280キロ離れたラス・ラノウフで、他の数名とともにカダフィ大佐の軍に捕まった。2日後、彼らは目隠しと手錠をされ、明らかに弱った状態の姿で、反政府勢力の戦闘員としてテレビ放映された。ソフィアン・サレム・セノウシの家族は、彼が拷問を受けており、深刻な危険にさらされていると心配している。

恣意的な逮捕、裁判なしの逮捕や拘禁、強制失踪、拷問、不公正な裁判、超法規的な処刑など、40年以上にわたるカダフィ政権下において、組織的な人権侵害が続き、加害者はまったく処罰されていない。リビア当局は、平和的な手段による批判や改革の訴えなど、政府に対する批判を容認せず、表現の自由を行使しようとした市民を常に拘禁してきた。1996年6月にトリポリのアブ・サリム刑務所でおよそ1200名の受刑者が殺された悪名高い事件は、同政権下のひどい人権状況を象徴している。何年にもわたり、リビア政府はその事実を認めることさえしなかった。遺族の賠償のための対策は講じられず、独立した調査も、加害者の裁判もなかった。こうしたことから、カダフィ大佐の軍に拘束された人びとの家族が、彼らの身の安全について非常に不安を覚えるのは、想像に難くない。

これは、アムネスティのブリーフィング・ペーパー *Libya: detainees, disappeared and missing* の抜粋・抄訳です。オリジナルの報告書(英文)は以下からダウンロードできます。

<http://www.amnesty.org/en/library/info/MDE19/011/2011/en>

---

Libya: detainees, disappeared and missing

Amnesty International

International Secretariat

Peter Benenson House, 1 Easton Street, London WC1X 0DW,

United Kingdom

抄訳: 社団法人アムネスティ・インターナショナル日本

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町 2-2 共同ビル(新錦町)4F

TEL: 03-3518-6777 FAX: 03-3518-6778

info@amnesty.or.jp

<http://www.amnesty.or.jp/>

---